

135. 昭和59年度滋賀県下に おける発掘調査の紹介 その3

25. 古墳時代後期・律令期の各転換期の集落跡 栗東町高野地先 高野遺跡

高野神社の西方にあり、野洲川左岸自然堤防上に立地する当遺跡は、従来、遺物の散布状況などから、古代末期～中世初頭頃にかけての集落跡と考えられていた。しかし、昭和59年7月より11月におよぶ発掘調査の結果、従来の推定どおりの集落跡とともに、新たに古墳時代中期から後期初頭にかけての集落跡が確認された。

検出された遺構は幅20m、延長100mの道路敷にあって、竪穴式住居跡8棟、掘立柱建物跡6棟以上とともに、多くのピット群が検出された。

竪穴式住居跡群は大別して二種の方向性を持ち、炉跡を持ち須恵器を伴わないもの、カマドを持ち、須恵器を伴うものというように、構造や出土遺物からも同様の結果を得た。特に後者はカマド横に室内土壌を持つものに対し、前者は土壌を伴わないという、顕著な相違点が見られた。また検出された2基のカマドは、いずれも良好な遺存状態を示し、なおかつ、支脚石、甌などが出土している。

次に掘立柱建物群は、現在のところ建物としてまとめられたものが6棟であるが、若干時代幅を有していると思われる。また、掘方規模や、周辺からの出土遺



竪穴住居跡群

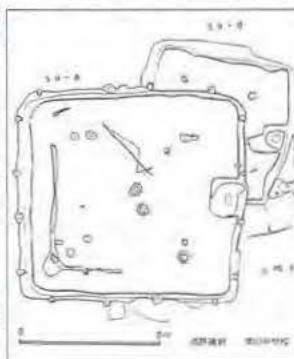
物のなかに、緑釉陶器や風字硯が見られることから、性格においても異なった建物が重複して同所に築かれたと考えられる。

以上、当該遺跡は道路予定地としての帯状のトレンチ的調査ではあったが、古墳時代後期における炉からカマドへの転換期、律令的村落から、中世的村落への転換期という、歴史的に見て2つの重要な大きな転換期を一部なりとも知り得ることが出来る遺跡として、注目に値する遺跡といえよう。

(滋賀県教育委員会 近藤 滋)

26. 大型竪穴式住居を伴う古墳前期の集落跡 栗東町六地蔵 高野遺跡

昭和59年2月より8月にかけて実施された葉山中学校用地の調査では、古墳時代前期の方形竪穴式住居20棟以上、平安後期から中世にかけての建物跡、井戸等が発見された。竪穴式住居のうちの2棟は、4支柱の他に各辺の壁際に4本ずつの柱をもつもので、他の住居とは様相を異にする。SH-8は、南北8m、東西7.6m、深さ40cmを測り、高野遺跡においては大型の部類に入る。ほぼ同床面に拡張前の壁溝と4支柱の痕跡を残す。合計16本の壁際の柱のほとんどは壁溝の外側にあり、壁面を削り真っ直ぐに立てられている。深さは、床面から10cm～30cmと4支柱60cmより浅い。東辺を除く3辺の柱間は、隅側がほぼ2mに統一され、中央は1.6m～1.8mを測る。東辺は、北側より2.6m、1.4m、2.2mを測り、他辺とは異なることより、中央部の狭い部分が出入口であったと思われる。検出された遺構の他に、その上屋構造を知る手がかりは全く



竪穴住居跡

無く、推測の域を出ないが、家屋文鏡にみられる低床式住居に近い上屋構造をもつ竪穴式住居と考えたい。柱間に規格性がみられることより板壁であろうが、横板積み込みの場合、四隅の処理が困難であるため、柱の外側に長い板を括りつけ隅で合わせたものと思われる。床までの深さを考慮すれば、地上からの壁の立ち上りが

1m前後でも、10m四方の大型住居に匹敵する空間を確保することができ、当遺跡においては中心的な住居であったと考えられる。この住居の時期を把握できる遺物は極めて少ないが、SH-9は庄内併行期、SH-8は布留前半を降らないと思われる。この時期において、県内でも特異な存在であり、自然発生的とも考えられないことから、竪穴式住居に対する保守性を持ちながらも、中央政権と直結した権力の誇示を感じるのである。(栗東町文化体育振興事業団 平井 寿一)

27. 古墳時代を中心とする大集落跡

栗東町辻 辻遺跡

本遺跡は国道8号線と県道守山・高野線(通称琵琶湖大橋取り付け道路)の交差する栗東町辻交差点付近を中心として周辺に広がる縄文時代以降近世にまでおよぶ複合遺跡である。中でもとりわけ旧野洲川左岸自然堤防状の微高地に形成された古墳時代前期から奈良時代にかけての集落跡にはその規模や資料の豊富さゆえに極めて興味深いものがある。

本遺跡においては1983年以降数次の調査が実施されており、これまでに竪穴式住居130棟以上、掘立柱式建物30棟以上の他、多数の溝跡や土坑が土器類や滑石製品等の遺物を伴って確認されている。

その内、今回報告する調査は民間倉庫建設に伴う事前調査として1983～84年度を通じて実施したものであり、調査総面積は約9700㎡である。今年度は前年度調査区域(約6100㎡)の南側区域、約3600㎡の調査を実施し、竪穴式住居30棟、掘立柱建物8棟の他、多数の溝跡や土坑等を確認している。

竪穴式住居跡や掘立柱建物跡はいずれも古墳時代前期から奈良時代の遺構である。前者では一辺5～6mの方形のものが大半を占め、屋内設備として炬やカマドを有している。カマドを持つ類では大半が東壁や北壁にカマドを持ち、そのコーナーには円形もしくは方形の土坑を付設する。後者には一角を棚で囲繞された2～3棟からなる建物群が認められる。溝跡では古墳時代前期から奈良時代のものの他、南北方向に流路を

取る平安時代の自然流路や多量の炉壁片が投棄された近世の溝跡等が認められる。

ところで、今回の調査では須恵器・土師器等の土器類の他、有孔円板等の滑石製品や砥石など多くの遺物が上記遺構より出土している。中でも古墳時代後期の土器類は栗東におけるこの時期の最も良好な資料と行うことができる。(栗東町文化体育振興事業団 大崎隆志)

28. 縄文時代後期からの集落跡

野洲町市三宅 市三宅東遺跡

調査は、日本アイ・ビー・エム野洲工場増築に伴うもので、その面積は12,000㎡である。

遺跡は、野洲川右岸の自然堤防上に立地する縄文時代～平安時代にかけての古代集落跡で、昨年発見された玉造工房で著名である。

本年度の調査は、第1調査区・第2調査区の二か所で、昨年7月より調査を着手し、本年3月に完了した。

第1調査区は、竪穴住居11棟、方墳1基、方形周溝墓12基等が検出された。竪穴住居は、大半が5世紀後半のもので、住居内より須恵器・土師器・漢式系土器が出土した。

住居には、造り付けカマドは付属しておらず、近江地方のカマド普及を知る上で重要である。

方形周溝墓は、弥生中期～後期のもので1辺8～10m前後のものが、周溝を共有している。

方墳は、1辺6m前後のもので、周溝内より多量の須恵器・土師器が出土、さらに周溝内の土壌内より石製ペンダントが発見された。

第2調査区は、食堂増築に伴う調査で、その面積は2,000㎡である。遺構は、方形周溝墓1基、溝3条、旧河道が検出された。方形周溝墓・溝は、弥生中期、下層の遺物包含層は縄文後期である。縄文土器は、後期初頭の中津式を主体とするものであり、他に叩石数点出土した。

以上のことから市三宅遺跡は、縄文後期に集落形成が開始されたことが明らかとなった。

(野洲町教育委員会 花田 勝宏)



竪穴住居群



漢式系土器(住居より)



遺構検出状況

29. 土馬出土の溝などを検出

野洲町北桜 北桜南遺跡

は場整備事業に伴う北桜地域の埋蔵文化財発掘調査は、本年度が第6次調査となる。調査対象地は、北は先年度調査地に接し、南は近江富士団地にいたる広大な地域で、対象面積約15万㎡を数える。調査期間は、昭和59年7月2日～同年10月26日。本調査に先立ち、おもに道路、排水路部分を重点に、全域の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、二か所のトレンチで遺構、遺物の存在が確認されたため、トレンチを中心に拡張、各々A地区、B地区と仮称、本調査を実施した。A、B両地区合わせての調査面積は約4000㎡。A地区では、平安時代末頃の掘立柱建物（東西棟1棟、南北棟1棟、ともに総柱なし、総柱構造に近い柱穴配置）、土塀5基、建物の区画溝、方形溝、小河川の旧流路などを検出した。出土遺物はおもに土器や建物の柱穴から出土しており、土師器、黒色土器、瓦器、羽釜、磁器など、12世紀後半を中心とする時期のものが多く、7～8世紀代の出土遺物も若干認められる。B地区はA地区の東側、大山川に近い南へ張り出す自然堤防上に位置する。検出遺構としては、7世紀後半～8世紀前半頃の掘立柱建物6棟（主屋2棟、倉庫4棟）、溝4条、土塀などがある。出土遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦などがある。またこの他に、溝底から7世紀後半～末頃と思われる古式土馬が一点完形で出土している。B地区で検出された掘立柱建物群は、建物群の規模や時期など、これまでの北桜地域の調査では認められなかった新たな知見であるといえ、北桜地域の在地豪族層の居宅として捉えられるものであり、今後その位置付けが問題とされよう。

（野洲町教育委員会 森 隆）

30. 室町時代の集落

野洲町富波甲 野々宮遺跡

野々宮遺跡は弥生時代～近世にいたる複合遺跡である。この地に約60000㎡を対象とし住宅建設が計画され、本年度より造成に先立ち調査を実施した。調査は12か所の試掘トレンチと重機進入箇所について実施し、試掘の結果、北半は旧家棟川の堆積作用により厚い砂に覆われ、調査の進展を妨げたが、ほぼ全域にわたり中世を主体とした遺構、遺物の存在を確認した。特に旧野々宮神社周辺では、鎌倉時代の土師器、黒色土器などがまとまって出土したほか、多数のピット、土塀が確認された。

進入路の調査は南北150m、約2000㎡について調査した。その結果、弥生時代前期の土塀と飛鳥時代の井戸、室町時代の掘立柱建物、井戸、溝、土塀などを検

出した。このうち、室町時代を主とする遺構は、南部の自然河川堤防上に立地する2×3間以上の総柱建物、溝、井戸からなる一群と、北部の2×2間以上の総柱建物2棟、区画溝、土塀からなる一群を確認した。これらに伴う遺物としては、多量の日常雑器をはじめ井戸より曲物・木筒や輸入陶磁器などがある。当該地周辺には上水原遺跡、常楽寺遺跡など中世を主体とする遺跡が知られ、継続される次年度の調査により更に集落の全体像が把握されてこよう。

（野洲町教育委員会 進藤 武）

31. 中世の農村集落跡

守山市横江町 横江遺跡

昭和58年度より県住宅供給公社の宅地開発による事前調査として実施してきた本発掘調査も本年度で2年目を迎え、その総発掘調査面積も18000㎡になり守山市横江の地域史に多大な成果を上げようとしている。ここではその成果のうち本年度分のうちから主要なものを述べる。なお一部分守山市が調査を実施したものについては市が別記する。昨年検出された中世の集落はその棟数を増やし、新たに10棟近くの掘立柱建物が発見され、その配置も調査地のほぼ中央に幅約3mの溝(堀)に囲まれた20m×40mの土塀の有る家屋を東西にしその溝を四方に伸ばすように延長させ区画割し、その1辺40mの区画の中に2棟構成で建物を並べるといふものである。さらにこの集落形態は前段階と思われる11世紀～13世紀代のコ字型の浅い雨落溝を持つ一棟構成の建物を一部壊し、現栗川・前川・海道川間の自然堤防を利用し区画に合うよう、河川幅を変え埋め立て計画性を持って整然と溝で囲まれた建物を配するというように全国レベルで起こっている中世後半期の集落都市整備のひとつの例としてとらえることができ、全国でも有数の遺跡であることがわかる。出土した遺物をもみても大量の土師質土器・東播系こね鉢・常滑甕等の日常雑器とともに白磁の水指・香炉・合子・皿・碗や青磁の闘花文碗・皿・梅瓶片等の磁器、碗・滑石



第七調査全景

製石鍋等の石製品、刀子、開元通宝・景德元宝・祥符通宝等の銭や種々の木製品等が大量に出土している。その他にも一部古墳時代前期の掘立柱建物集落が重複して存在している。今後2年間残された2万㎡の調査を踏まえて歴史に記されなかったこれらの集落の成立と衰退の意味を捉え農村中世集落跡のひとつとして評価される必要性が今後の課題である。

(滋賀県教育委員会 木戸 雅寿)

32. 弥生時代～中世の複合遺跡

守山市杉江町 杉江北遺跡

県営かんがい排水事業・ほ場整備事業に伴う発掘調査の内、杉江北遺跡の概要を記す。

守山市杉江町に所在する小津神社の北側は、従米の調査により中世集落の存在が明らかにされているが、今回の調査においても検出した。1～2m幅での調査のため不十分ではあるが、溝によって区画された建物等、多数のピット・溝が検出された。溝内からは12～13世紀の黒色土器碗・土師器小皿がまとまって出土したが、大皿は1点にすぎない。

また、隣接するトレンチからは、8～9世紀代のピット・溝、弥生時代後期の溝が検出された。

以上の状況より、杉江北遺跡は中世集落だけではなく、弥生時代後期からの複合遺跡であることが明らかになった。(財滋賀県文化財保護協会 小竹森直子)

33. 中世の集落跡

守山市杉江町 杉江遺跡

新守山川改修工事に伴う発掘調査における杉江遺跡の概要を記す。

調査区は河道掘削予定地約30m×100mで、中央の用水路によって下半・上半に2分される。

まず下半では、耕土直下より試掘で確認された中世遺構が検出された。西端は自然のおち込みになっており、これより東へ約35m、溝で区画された区画に溝・ピット等を多数検出した。大型礎石建物・倉庫等、3～4方で各2～3棟ずつの掘立柱建物群で構成されて

いる。この時期の井戸は1基であり、他の1基は削平のため一緒に検出された8世紀のものである。その他に、座敷墓と考えられる120cm×60cmの土壇墓を検出した。10cm～15cmの間に2面中世の遺構面があり、両者を合わせて12～15世紀の時代幅がある。

上半でも下半同様の中世遺構面をまず検出した。頭初、畑であり後世の造成と考えていたが、旧地形そのものが高くなっており、かつ旧河道を利用し、西側の低部面との区画がなされている。

下半・上半共に集落の縁辺部分の調査ではあったが、今後増加するであろう中世集落の資料の1つとなれば幸いである。

なお、現在8世紀代の井戸に対応する遺構面を調査中であり、また弥生土器を出土していることから、より下層の遺構の調査も継続して行う。

(財滋賀県文化財保護協会 小竹森直子)

34. 旧河道より多数の木製品出土

守山市横江町 横江遺跡

横江遺跡は守山市の南部・横江町の南西一帯に広がる。古墳時代・中世の二時期にわたる集落遺跡である。遺跡のすぐ横には旧野洲郡と旧栗太郡を分けた堺川が流れており、本遺跡はこの自然堤防上に立地している。横江遺跡の調査は県住宅供給公社による宅造に伴う事前調査で、昭和58年から滋賀県教育委員会と守山市教育委員会によって4年計画で調査が進められている。ここでは特に古墳時代の遺構についてその概略を説明したい。

昨年度調査を行った第1調査区からは数棟の掘立柱建物を含む多数の柱穴群・溝・土壇(5世紀後半～7世紀)を検出した。今年度調査を実施した第8調査区はこの第1調査区に隣接しており、関連の遺構が期待された。調査の結果、旧河道・井戸・土壇・それに多数の建物柱穴群を検出した。

旧河道は幅25m以上あり、多量の土器や着柄鋤・鍬(木製品)・竪杵・弓など多数の木製品が出土した。井戸は2基検出したが、いずれも削りぬきの杵を持ち、



8、9世紀の溝



遺構検出状況



遺構検出状況

河道内に構築している。また1m×2mの楕円形状を示す土壌からは土師器や須恵器にまじって製塩土器がかなりまとまって出土している。これらの遺構の時期は出土遺物から6世紀初頭のものと考えられ、本集落がこの時期掘立柱建物のみで構成されていた可能性が高いと思われる。いずれにしても今後調査が進めば、集落の実態がより明らかになってくるであろう。

(守山市教育委員会 宮下 陸夫)

35. 玉づくり工房を含む弥生後期～ 平安時代の集落跡 守山市守山町 吉身西遺跡

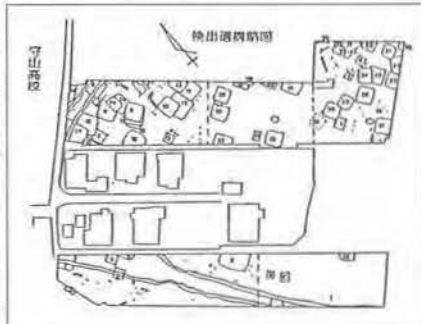
守山市守山町、下之郷町地先に所在する県立成人病センター一帯に広がる吉身西遺跡において、河川改修工事の事前調査を行った。農林省滋賀食糧事務所南接地点では弥生後期の竪穴住居3棟(内1棟は五角形プラン)、同期の掘立柱建物(納屋状)3棟、土壇3基、古墳時代後期溝状遺構、平安時代掘立柱建物3棟以上、平安時代以前の畑作関連と考えられる溝状遺構などを同一面で検出した。この地点は同遺跡の南限に位置し南への広がりはなかった。五角形住居を含む住居はわずかずつ時期を異にしているようで、土壇→五角形住居→方形住居と細区分の流れをみることができる。

県立保健専門学校と市立図書館の間の地点での調査では弥生時代後期の五角形住居1、古墳時代前期の方形プラン住居3棟、方形周溝墓1基、同後期の掘立柱建物10棟以上、同溝6条、土壇多数が検出され、調査範囲全面にひろがっている。この地点でも五角形住居が知られ、市内で計7例目を数えることになった。

特筆すべき内容としてこの古墳時代後期の遺構には滑石の製品・未製品、チップ・原石が出土し、最低4か所の土壇内に特に多く、玉作りに関連する遺構ではないかと考えられたこと。次に、古墳時代後期(6世紀前半後葉)には既に掘立柱建物の採用がはじまっていることが判明したことである。南西に位置する金森東遺跡、また吉身西遺跡でも方形周溝墓、方・円墳の残骸がみつかり、幕制の変化やその選地をう



五角形竪穴住居跡



検出遺構全図

かがうことができる良好な遺跡であると考えられ、遺跡の範囲や隣接遺跡の生成、衰退究明の重要なポイントと言える。なお、滑石は管玉、白玉、有孔円板未製品、白玉製品、板状のつくりかけ、チップ、拳大原石がみられ、勾玉の内磨き砥石が2点出土しており、玉づくり遺跡として良いと思われる。

(守山市教育委員会 山崎 秀二)

36. 竪穴住居44棟を検出 守山市守山町 金森東遺跡

昭和59年10月より、宅地造成に先立ち実施している金森東遺跡発掘調査地は、守山高校の東側に近接する守山市守山町字七反々町他に所在し、面積は約5,500㎡を測る。本調査地の北東方の周辺地では、当遺跡や吉身西遺跡の調査が数多く実施されており、開発の活発な地域である。

調査は対象地(約5,000㎡)に5調査区を設け、順次進めたが、最後の調査の測量と周辺部の補足調査を残すのみという進捗状況である。

調査途上ではあるが、現在までの調査成果は図のとおり、竪穴住居44棟、倉11棟の他多数の溝、土壇、ピットを検出している。竪穴住居の構築時期は、弥生時代後期を最古の6世紀前半を最新の時期におくことができ、この間継続的に構築された集落と考えることができる。

(守山市教育委員会 岩崎 茂)

37. 弥生後期～古墳時代後期の墳墓群 守山市金森町 金森東遺跡

金森東遺跡は、宅地造成に先立つ調査によって昭和57年に新たに確認された遺跡である。本調査は昭和58年から2年計画で調査しており、今年度は約12,000㎡を対象としている。

遺構は耕土直下において検出され、竪穴住居、土壇墓、方形周溝墓などを発見した。

竪穴住居は12棟検出し、うち3棟は東西に走る大溝の肩部で見つかり、プランは円形ないし方形を呈し、大きいものは8m～10mを計り、弥生時代後期の遺物が出土した。

土壇墓は調査区の西方において4基検出しており、周辺にも同様の落ち込みが見られることから群を成すかも知れない。遺物は須恵器が多く、四隅に埋置した土壇墓も検出した。方形周溝墓は15基検出し、溝を共有するも

のと単独のものに分かれる。規模は8m前後から15m程度の台状部を計るものが多く、なかには3mと小型の周溝墓もみられる。遺物は弥生時代後期の喪・鉢など出土している。



方形周溝墓遺景

方形周溝墓は昨年

の調査でも数基検出、総数30基前後になると思われる。また古墳も数基見つかり、さらに周辺にも広がる可能性がある。(守山市教育委員会 畑本政美)



検出遺構

(大津市教育委員会 須崎 雪博)

38. 近江国府とかがわる掘立柱建物群

大津市瀬田三丁目 野畑遺跡

野畑遺跡は瀬田丘陵から琵琶湖あるいは瀬田川に向かって樹枝状に幾筋にもびる丘陵のうち、最も南に位置し、東から西にのびる丘陵上に存在しており、遺跡の周辺には、近江国府跡、堂ノ上遺跡、瀬田廃寺跡といった近江の古代を考える上において重要な遺跡が密集している。

野畑遺跡は過去、昭和55・57年の二度、宅地造成工事に伴う発掘調査が実施され、古墳時代の竪穴式住居跡、奈良から平安時代の掘立柱建物跡、井戸跡、竃跡といった周辺の遺跡と密接な係わりを持った遺構が検出されている。

今回の調査は昭和55年調査地点とは東を接する地点で実施し、竪穴式住居跡7棟、掘立柱建物跡5棟(うち1棟は一部しか検出していないため棚跡の可能性もある)を検出した。

そのうちの竪穴式住居跡は一辺が4～6.5mの方形の平面プランを呈しており、周囲に幅0.2～0.5mの周溝がめぐり、北辺中央にカマドが設置されており、その1つには、土製支柱が備えられ、使用中かと思われるような形で土師器の甕が出土した。さらに検出した7棟のうち4棟は2棟ずつが切り合っており、建替え、拡張の状態が明瞭に観察された。これらは、出土した遺物から古墳時代前期末から中頃に比定できる。

掘立柱建物跡は築行の方位がN9°EとN12°E付近の二つに分けられるが、前者は後者と比較し、柱の掘形及び柱穴の規模が大きく、しかも、近江国府跡の主要建物や堂ノ上遺跡の建物と同一方位を示しており、柱穴出土の遺物から奈良から平安時代に比定できる。

今回の調査で得られた資料も過去のそれと同じく、瀬田地区の古墳時代、近江国府に係わる問題解明のための貴重な資料となるものとみられる。

39. 奈良・平安時代の棧橋跡

大津市田上黒津町 黒津遺跡

黒津遺跡は、大津市田上黒津町宇江口の大日山南麓に広がる集落遺跡である。発掘調査は、大日山南麓一帯で計画されている宅地開発予定地を対象として、昭和59年11月13日から約2か月間にわたって実施した。その結果、開発予定地の東端部分から、瀬田川の旧河道のものともみられる河岸跡、杭列、掘立柱建物跡、土壌などの遺構が見つかり、遺構は北から東にかけての地域に広がること明らかになった。

トレンチ北寄りから見つかった北西から南東に走る50～60cmの段は、埋土の堆積状況や地形などから、旧河道の河岸と見られ、大きく上下2層に分かれる埋土中から古墳時代後期から終末にかけての土器類、木製品類(下層)、奈良時代から平安時代にかけての土器類・瓦類・和鏡(上層)が出土した。そして、これに直交するように配置された2か所の杭列は、棧橋跡の可能性が高い。さらに、河岸跡の北側には、掘立柱建物跡などが検出され、北方向へ建物群が広がることが予想される。

瀬田川は明治時代初め頃まで、大戸川との合流点付近で西と東に流れが分かれており、東流は現在の黒津集落と建設省琵琶湖工事事務所との間を流れていたが、今回の発掘調査により、それ以前はかなり河道を変えていたか、あるいは流れの一部が大日山の麓にかけて入り込んだ入江状の地形を呈していたのではないかと考えられるようになった。

(大津市教育委員会 松浦 俊和)



遺構平面図